

C O N T E N T S

開会挨拶

武庫川女子大学学長／女性研究リーダー育成推進センター長 高橋 享子	2
--	---

基調講演

日本文化を未来へ伝えるために 彬子女王殿下	3
--------------------------------	---

令和7年度事業報告

女性研究リーダー育成推進センター副センター長 中尾 賀要子	7
--	---

研究発表

文様のさまざま ―染色型紙と利活用― 文学部歴史文化学科 講師 加茂 瑞穂	8
--	---

出版時代の文学 ―西鶴の画期性とは何か― 文学部日本語日本文学科 教授 羽生 紀子	11
--	----

閉会挨拶

武庫川女子大学副学長／文学部長 郡 千寿子	15
-----------------------------	----

会場風景	16
------------	----

アンケート結果報告	17
-----------------	----



令和5年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)

女子総合大学における挑戦的 次世代女性リーダー育成プログラム 第3回シンポジウム

女性研究者の視点が拓く日本文化の新地平

日時：令和8年2月13日（金）13:30～15:30

場所：武庫川女子大学中央キャンパス 公江記念講堂

司会 ラジオパーソナリティ・
本学非常勤講師

塩田 えみ

13:30 **開会挨拶** 学長／女性研究リーダー育成推進センター長 高橋 享子

13:35 **基調講演**

日本文化を未来へ伝えるために 彬子女王殿下

14:35 **令和7年度事業報告**

女性研究リーダー育成推進センター副センター長 中尾 賀要子

14:45 **研究発表**

文様のさまざま ―染色型紙と利活用―

文学部歴史文化学科 講師

加茂 瑞穂

出版時代の文学 ―西鶴の画期性とは何か―

文学部日本語日本文学科 教授

羽生 紀子

15:25 **閉会挨拶** 副学長／文学部長 郡 千寿子

開会挨拶

武庫川女子大学学長
女性研究リーダー育成推進センター長 **高橋 享子**



「武庫川女子大学女子総合大学における挑戦的次世代女性リーダー育成プログラム第3回シンポジウム」の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。このシンポジウムは、本学が文部科学省より「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）」の採択を受け、研究力強化とリーダー育成に取り組む一環として毎年実施しているものです。第3回となる今回は、三笠宮家の彬子女王殿下に「日本文化を未来へ伝えるために」のテーマで基調講演を賜ります。殿下におかれましては、ご公務ご多忙の折、私どもの取り組みにご高配を賜り、基調講演をお引き受けくださいましたこと、教職員学生一同、この上ない光栄に存じます。

さて、我が国において、女性研究者の更なる活躍は、学術発展はもちろん、社会の多様性を広げる上でも期待される所です。殿下におかれましては、日本美術史の研究に邁進され、オックスフォード大学で博士号を取得されるなど、研究者として先駆的な道を歩んでこられました。殿下の

真摯な研究姿勢、文化芸術を通じた国際的な御活動は、リーダーを目指す若手研究者にとって、進むべき道を照らす光です。本学は、創設者である公江喜市郎がオックスフォード大学を始めとするイギリスの全人教育に感銘を受け、1939年に武庫川学院を創設した経緯があり、殿下がご留学体験を描かれたご著書にご縁を感じております。また、本学はトルコ・バフチェシヒル大学との一般交流協定を通じてトルコとのつながりも深く、この点でも一般社団法人日本・トルコ協会総裁である殿下との共通点を見出して光栄に存じている次第です。殿下の基調講演に続き、本学の女性研究者二人の研究発表もございます。本日のシンポジウムが、この場に集った生徒、学生をはじめとする一人一人に新たな一歩を踏み出す勇気と深い洞察を得る機会となることを期待いたします。

最後に、彬子女王殿下の益々のご健勝をお祈り申し上げますとともに、本日お集まりいただきました皆様にとって実り多き時間となりますことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。





日本文化を未来へ伝えるために

彬子女王殿下

本日はこのような機会を頂戴いたしまして、大変ありがとうございます。私、今回ちょっといろいろ失敗したなと思っておりまして、このシンポジウムが「女性研究者の視点が拓く日本文化の新天地」という、なんだか仰々しいタイトルなのに、私が基調講演でよろしいのかなと、いまだにドキドキしております。私がちゃんと話を聞いていなかったのが悪いのですが、こんなにたくさんの方がいらっしゃるということも存じておらず、シンポジウムだから大学の研究者の方たちが集まれる、多くても数百人くらいの会かなと思っておりました。日本文化をテーマにされたシンポジウムだということで、今日の「日本文化を未来へ伝えるために」というタイトルをつけたのですが、原稿を用意する段になって改めてこのシンポジウムのタイトルを見て、「あ、このタイトルで合ってたかしら」と思っております。「予想していたのと違うぞ」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、「内容を考えるのを失敗したんだな」と思って、温かい目でご覧いただけたらと思っております。

では、始めさせていただきます。私は新聞やテレビのインタビューなどで、「女性皇族としてのお考えをお聞かせください」や、「女性皇族としてどのようにありたいですか」といった質問を投げかけられることがよくあります。こういったことを聞かれますと、私はいつも答えに困ります。男性皇族でしか出席できない儀式などはもちろんあります。ただ、基本的には、私が男性皇族であっても女性皇族であっても、私がしていたことに変わりはないと思いますし、「女性皇族として私が思うことは何もない」というのが正直な答えです。それですと話が数分で終わってしまいますので、本日はもう少しお話を膨らませていこうと

思います。私は女性皇族としてはもちろん、女性としても、苦勞したことや困ったことは特にありません。スカートもズボンも両方履けますし、服や持ち物は地味な色でも明るい色でもいい。ショートカットでもロングヘアでもいい。いろいろ楽しめるからいいやん、と思ってしまいます。結婚、出産、子育てなど、女性であれば直面するであろう壁も、私はまだ経験していません。ただ、女性研究者の多くは、結婚しても旧姓のまま書籍や論文を発表します。苗字が変わることで、同一人物として検索ができなくなり、研究者としてのキャリアが止まったように見えてしまうからです。私自身も、もし結婚して苗字が変わったとき、「彬子女王」という名前をペンネームとして使い続けられるのだろうかと考えたことはありますが、机上の空論ですので、悩んだうちには入らないでしょう。政治的な発言と取らないでいただきたいのですが、そもそも私は、男女は平等ではないと思っています。脳の構造も、体の仕組みも違うのですから、同じ枠組みの中で考えること自体に無理があると思います。例えば、男性に比べて女性は力が弱い。これは差別でも何でもなく、事実です。私は生まれたときから警察の方々が身近にいる環境で育ちました。中等科に進学する際、女子校であることから、「女性のほうがスマートな護衛ができるのではないか」と、女性護衛官を側衛にする案が出たことがあります。しかし父は、「女は男より力が弱い。本気の暴漢が来たとき、その人が本当に娘を守れるのか確信が持てない」としてお断りになりました。以来、我が家の側衛は代々男性が務めています。百貨店の女性服売り場で、いかつい側衛が所在なさげに立っている姿を見ると、少し申し訳ないなとも思います。もちろん、女性警衛官の方々には共

感できることも多く、女性ならではの配慮に助けられる場面もたくさんあります。ただ、女性1人で対象者を守るとするのは、やはり無理があるでしょう。適材適所で役割分担をすることが大切なのだと思います。車の免許を取ったとき、タイヤ交換の実習で「手で上げられない人は足で踏んでください」と言われましたが、私は足で踏んでもジャッキは動きませんでした。教官にどうしたらいいか聞くと、「通った車を止めて、男性に助けてもらってください」と言われました。これでいいのだと思います。同じ土俵で張り合おうとするから無理が出るのです。

研究者としての私の原点を作ってくくださったのは、祖父・三笠宮殿下でした。殿下は、答えを教えるのではなく、複数の資料を示し、「自分で答えを見つけなさい」という教えであったと思います。そのおかげで、私は「調べること」が好きになり、1つの資料を鵜呑みにせず、自分なりの答えを導く習慣が身につきました。この教えこそが、私を研究者の道へ導いてくれたのだと思っています。三笠宮殿下が蒔いてくださった研究者の種に、水と肥料をやり、芽を出させてくださったのが、学習院大学の4年間であったと思います。学習院大学の史学科は、先生方同士がとても仲が良く、1年生の時には研修旅行という名の懇親旅行がありました。1年生全員に加え、先生方も全員参加されます。また、4年生の時には卒業旅行もあり、こちらも先生方全員と一緒にいくという、少し珍しい学科であったと思います。学習院大学史学科は、先生方の間では冗談交じりに「学酒院大学酒学科」と呼ばれるほど、皆さんお酒がお好きでした。私はお酒をほとんどいただけないのですが、「史学科に4年間通っていて、お酒を飲まずに終わったのはすごいことだ」と言われるくらい、懇親の場が頻繁にありました。史学科では、日本史・東洋史・西洋史をすべて学びますので、ほとんどの先生の授業に出ることになります。1学年90人ほどという規模もあり、先生方とも学生同士とも顔なじみになりやすい、とても良い環境だったと思います。現在、私は日本美術を専攻し、日本文化の継承に関わる活動を中心にしておりますが、学部時代はスコットランド史を専攻していました。スコットランドの伝統的な格子柄を「タータン」と言い、それを使ったスカー

ト状の衣類を「キルト」と呼びます。日本では「タータンチェック」という言葉が一般的ですが、これは和製英語で、英語では単に「タータン」と言います。このタータンを研究したいと指導教授に申し上げた際、先生が一瞬眉をひそめられたのをよく覚えています。日本にはスコットランド史の研究者がほとんどおらず、一次資料も参考文献も非常に限られていたからです。それでも先生は、読むべき文献や研究のアプローチについて、非常に丁寧に指導してくださいました。この先生に出会っていなければ、博士論文を書くまで研究が好きになることはなかったと、はっきり言うことができます。私がスコットランドに興味を持ったきっかけは、子供の頃、父に連れて行って頂いたハイランドゲームでした。ハイランドゲームは、スコットランド北部のハイランド地方で行われる、力比べの競技会のようなものです。筋肉隆々の男性たちがキルトを身につけ、丸太やハンマーを投げる姿は、子供心に非常に強烈な印象を残しました。「あれは一体何だったのだろう」という疑問が、結果として卒業論文にまでつながりました。私は、スコットランド人としてのアイデンティティがどのように形成されてきたのか、そして、その形成にタータンがどのような役割を果たしたのかをテーマに、卒業論文を書きました。口頭試問の際、先生からは「タータンをやると聞いたときはどうなることかと思ったけれど、よくまとまっていたね」と言われ、褒め言葉なのか呆れられているのか分からない評価をいただきました。その後、私はオックスフォード大学に留学することになります。父がオックスフォード大学で学ばれていたこともあり、幼い頃から「お前はオックスフォードに行くんだ」と、半ば呪文のように言われて育ちました。

学習院大学には、オックスフォード大学マートン・カレッジとの提携制度があり、休学せずに留学できることが分かりました。そこで、この制度を利用してオックスフォード大学へ留学することを決めました。私が所属していたマートン・カレッジには、3学年合わせて約300人の学部生が在籍しており、専門分野も物理、化学、医学、歴史、言語学、法律、政治、音楽など多岐にわたっていました。オックスフォードでは、ほとんどの学生が毎日同じ食堂に集まり、10メートルを超

える長テーブルに空いた席から自由に座ります。そのため、留学して1年が過ぎる頃には、専門に関係なく多くの学生と顔見知りになり、日本ではなかなか接点のなかった理系分野の友人もたくさんできました。当時、マートン・カレッジの学部生で日本人は私1人だけでした。そのため、日本に関する質問は、政治、経済、歴史、文学を問わず、すべて私に向けられました。日本にいた時であれば、「専門ではないので分かりません」と言えたことも、海外では「自分の国のことなのになぜ分からないのか」と言われてしまいます。その経験を通じて、私は自分がいかに日本という国について知らなかったかを痛感しました。同時に、英国の人々が自国の歴史や文化について非常によく理解していることにも驚かされました。理系の学生であっても、シェイクスピアの話ができ、オペラやバレエ、クラシック音楽を日常的に楽しんでいる人が多くいました。それに比べ、日本人で源氏物語について語れる人がどれだけいるのでしょうか。オックスフォードでは、日本文学研究の第一人者であったドナルド・キーン先生から、源氏物語の魅力と歴史的意義について長時間お話を伺う機会がありました。外国の方が、日本の文化について深い愛情を持って語られる姿を前に、私はただうなづくことしかできず、強い恥ずかしさを覚えました。この経験を通じて、私は初めて「自分が日本人である」ということを強く意識するようになりました。そして、日本の代表として、きちんと日本文化を学び、正しい知識をもって海外の人々に伝えたいと思うようになりました。そのような時期に、マートン・カレッジの学長であり、中国美術史・考古学の権威であるジェシカ・ローソン先生から、「日本美術でチュートリアルをしてみませんか」と声をかけていただきました。この出会いが、私が日本美術へと専門を移す、大きな転機となりました。

その後、私は日本美術に専攻を移し、2度目の留学では、大英博物館の日本美術コレクション形成史をテーマに博士論文を執筆しました。博士課程在籍中の5年間は、大英博物館でボランティアとして勤務させていただき、日本セクションのオフィスにいる時間が最も長かったように思います。大英博物館には、1年を通して多くの日本人研究者や作家、文化財関係者が調査に訪れます。

著名な学者の先生方や、文化系財団の関係者、館長クラスの方々とは一緒に過ごす機会にも恵まれ、日々が貴重な学びの連続でした。多くの方々とお話しする中で、共通して感じたのは、「文化財は守らなければならない」「伝統文化は続けていかなければならない」という強い意識でした。しかし同時に、それぞれの分野が個別に問題を抱え、異分野間で問題を共有し、連携して解決策を考える機会がほとんどないという現状にも気づかされました。帰国後、京都の大学で勤務するようになり、作家や職人の方々と直接お話しする機会が増えました。そこで皆さんが口をそろえておっしゃるのは、「このままでは日本の伝統文化は残らない」という切実な思いでした。

文化は、需要と供給で成り立っています。しかし今、そのバランスが大きく崩れています。例えば、日本には素晴らしい竹工芸の技術がありますが、「竹なのにこんなに高いのか」と感じる日本人は少なくありません。かつて、堺の田辺竹雲齋家の竹籠は、嫁入り道具として家1軒分に相当する価値がありました。しかし、今ではそのような価値観は失われてしまっています。表具に使われる部品を作る職人がいなくなれば、いくら表具師を育てても、伝統的な表具は成り立ちません。しかし、その部品1つ1つを文化財として保護することは現実的ではありません。大切なのは、表具を「守る」ことではなく、「表具をした作品を生活の中で使いたい、飾りたい」と思う人を増やすことなのです。日本には文化財保護法があり、国宝や重要文化財として「守るべきもの」を選び、保護する制度があります。しかし、なぜそれが大切なのか、という説明が十分になされているのでしょうか。「これは大切だから守りなさい」と上から示されるトップダウンの方法だけでは、文化は本当の意味で残りません。私たち一人一人が、「これは大切だから残したい」と思い、下から声を上げていく、ボトムアップの仕組みが必要なのではないかと思うようになりました。文化は、ガラスケースの中であってこそ文化なのではありません。かつて、浮世絵は今で言うアイドルのポスターのような存在でした。日常の中で楽しむものだったのです。抹茶も同じです。お茶会や稽古の時だけでなく、生活の中で気軽に楽しめる飲み物です。文化は、生活の中に息づいてこそ文化であ

り、生活から切り離された瞬間に、形式化し、やがて死んでしまいます。着物を着る、和菓子を食べる、畳でくつろぐ。そうした何気ない体験が、日本文化を未来につなげていくのだと思います。

こうした思いから生まれたのが、「心游舎」という団体です。心游舎は、日本の未来を担う子供たちに、本物の日本文化に触れる機会を提供し、生活の中に取り入れるきっかけを作ることを目的としています。神社やお寺は、かつて文化の発信拠点でした。その場所を、子供たちが気軽に集まり、共同体で育つ場として取り戻したい。そんな思いで、ワークショップを開催しています。和菓子作り、祭り、工芸、伝統芸能。日本文化は「鑑賞するもの」ではなく、「体験することで伝わるもの」だと私は考えています。活動を通して、私が強く感じるのは、子供たちの「なんで？」という力です。大人になるにつれ、私たちは「そうい

うものだから」と考えることをやめてしまいがちです。しかし、「なんで？」と考えることを止めるのは、とても危険なことです。なぜ行われているのか。なぜ続いてきたのか。理由を知ること、理解は深まり、意味が分かり、それは自分のものになります。

私がつどり着いた結論は、「伝統とは、残すものではなく、残るもの」という考え方です。残ってきたものには理由があり、失われるものにも理由があります。人間が抗えない流れもありますが、今できることは、日本文化が自然に残っていく未来を、自分たちの手で整えることではないでしょうか。本日のお話が、「日本文化とは何か」「誰に手渡していくのか」を考えるきっかけになれば幸いです。

本日は長時間にわたり、ご清聴ありがとうございました。



令和7年度事業報告



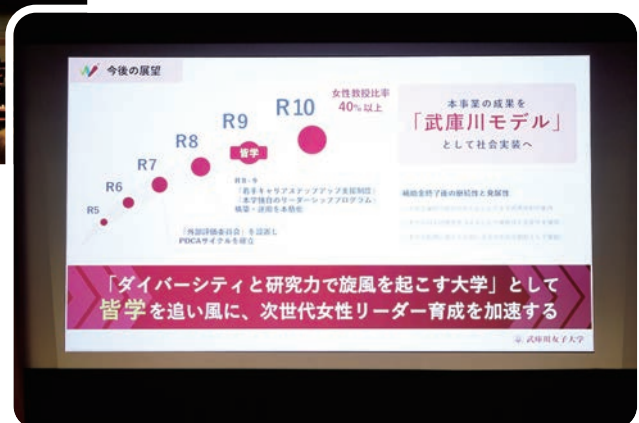
女性研究リーダー育成推進センター副センター長 中尾 賀要子

事業紹介動画でご覧いただいた「女子総合大学における挑戦的次世代女性リーダー育成プログラム」について、令和7年度のハイライトをお話します。

まず、目標としていた数字の報告です。新しく採用した研究者のうち、女性の割合は60.4%で、目標をクリアしました。大学全体の女性研究者の割合も46.3%となり、こちらも目標を達成。女性教授の割合は31.7%と、目標にはあと一歩でした。しかし、大きなニュースがあります。今年度、本学で初めての女性学長が誕生しました。これは大学の歴史を変える、とても大きな一歩です。次に、令和7年度具体的に行ったサポートです。「女性研究リーダー研修制度」では、4名の先生方が国内外へ研究留学。また「架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究支援制度」で

は、6名が国内、2名が海外との共同研究チームをまとめる研究リーダーとして活躍しています。さらに、4名の博士課程・博士後期課程の大学院生が「学生フェロシップ制度」を利用し奨学金を獲得。そして9名の先生方が研究活動に専念するための「教育支援員制度」を利用しました。その他にも、動画でも取り上げられていた「サイエンス・コモンズ セミナー」、「女性リーダーシップ研修」など、女性研究者のキャリアを後押しする様々なサポートを同時展開することで、女性研究リーダーが活躍する環境整備を進めています。

令和9年度からは「皆学」が始まります。私たちはこの変化をチャンスと捉え、「ダイバーシティと研究力で旋風を起こす大学」としてますます進化し続けます。以上で令和7年度の活動報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。



研究発表



文様のさまざま —染色型紙と利活用—

文学部歴史文化学科 講師 加茂 瑞穂

文学部歴史文化学科の加茂瑞穂（かもみずほ）と申します。

本日はこのような機会をいただきましてありがとうございます。本日は私自身のこれまでの研究について少しご紹介できればと思います。また、本日紹介する、日本の型紙、文様に少しでも関心を寄せていただければ嬉しく思います。

本日の内容を簡単に紹介します。まずは、型紙に関心を抱くことになったきっかけ、続いて型紙とは何なのか、型紙から何が分かるのか、型紙という染色に使う道具をどのように身近なものへ活用してきたのか、そして最後にまとめという流れで進めていきたいと思っています。

まず私の問題関心についてお話します。私の専門分野は、江戸時代から明治時代頃までの染物、織物のデザインに関する歴史です。特に、文様に関心があるのですが、日本の文様と文化の結びつきについて、少し述べておきます。文様というのは、浮世絵や着物、帯、あるいは美術工芸品など、様々なものに表現されています。これらを見ていく中で、実は日本には豊かな文様の文化があるということが分かってきて、その歴史的な背景を私自身の問題関心としています。

続いて、私自身が型紙に関わることになったきっかけですが、私が大学院生の時に型紙のデジタル化を進めるプロジェクトが立ち上げられるということを聞きました。デジタルアーカイブという、資料自体をデジタルカメラで撮影してデータ化していくことと、それに付随する情報もデジタルで蓄積して、情報を一元的にまとめていこう、という内容です。このプロジェクトでは、資料の整理から携わることができるということで、たくさんの資料に触れられることが私自身とても魅力に感じました。加えて、様々な文様が表現されて

いる型紙に研究対象として関心を持つことになりました。ただ、私自身は当初、型紙に関する知識がゼロの状態の研究をスタートすることになりました。

それでは、染色型紙とは何かということを紹介したいと思います。染色型紙とは、主に布地を染めるために使用される道具です。色は茶色っぽいのですが、もとは和紙を数枚重ねています。その上に柿渋を塗布しているのですが、それによって防水効果が得られます。さらにそこへ型紙用の彫刻刀を使って、文様を彫ります。白い布地の上へこの型紙を置いて、その上から染料あるいは防染の糊を置いていきます。型紙を彫刻する職人は、極限にまで高められた技術を持った方々です。こうした型紙生産の最盛期は江戸時代ですが、現在も三重県を中心に生産されていて、型紙製造の技術は、国の重要無形文化財にも認定されています。実際に型紙を使って、染められたものの例としては、袴、浴衣、着物などが挙げられます。染色型紙を使って、様々な文様が表現されてきたのです。

型紙は布地を染めるために使用される道具なのですが、近年は日常生活で洋服を着ることが一般的となり、型紙の需要も減っています。一方で型紙に彫刻された文様は多様ですので、保存して活用を検討する動きもあります。私が最初に出会った型紙のコレクションは、もともと型紙を製造していた会社が所蔵するコレクションです。江戸時代から戦後のものまで約18,000枚ありました。これらの型紙をデジタル化するという取り組みから、型紙との出会いが先ほど申し上げたように始まっています。なお、型紙に限りませんが、染織業に関わる下絵や型紙といった完成品ではない資料の多くは、実は大量に残っています。道具とし

ての型紙というものも大量に残っていて、染屋さんにお話を聞くと、数千～数万枚単位での保存が当たり前だと、うかがいました。ただ、先ほども申し上げたように着物を着る人が減ったことにより、型紙も捨てられたり、廃業する場合は、まったく別の場所に散逸してしまうことが実際に起きています。

学术研究を見ましても、実は完成した着物であるとか布地が学術資料として長らく扱われてきた歴史があり、型紙はあまり研究されてきませんでした。また、学术研究をするにしても、やはり資料数が多いということはネックになります。どうやって整理分類すればいいのかというようなことを私自身も試行錯誤しながらコツコツと継続してきました。もちろん私一人ではありませんけれども、地道に資料の整理を進めてきました。

次に型紙から分かることについて紹介していきたいと思います。なぜ型紙を研究する必要があるのか、どんなことに役立つのかという一つの答えになるのではないかと考えています。まずは、様々な文様が型紙には表現されているということが挙げられます。植物、幾何学、動物など、本当に様々な文様が彫刻されています。型紙には数百種類の文様を確認していて、非常に豊かな文様の文化が開いていたことがわかります。また、こうした文様を庶民も身にまとっていたということが型紙から分かってきます。こちらのスライドに一例として挙げましたが、これらは全て梅の花をモチーフにした型紙の一部分です。

型紙の彫刻技法は複数ありますので、その技法を駆使していることがわかります。また、梅の花も丸くするのか、松を使って梅の花を形作るのかなど、無限とも言える工夫をして表現しています。梅を例に挙げても、多様なアレンジを知ることができ、過去の人々がデザインに対して探求心を持ち、新しいデザインを生み出そうと工夫を積み重ねていたことが、コレクションを整理することによって見えてきました。加えて、数万枚にも及ぶ複数の型紙コレクションを調査していくと、全く別の場所から同じ型紙を見つけ出す事例も確認することができ、同じデザインの型紙が別の場所で流通していたことを確認することができました。実際に染めたものは残っていませんが、こうした型紙の存在が当時の好みなどを明らかにする

手がかりにもなります。

こちらの型紙は、漢字で「大」という文字が彫刻されています。それから、カタカナの「サ」と最後にカタカナの「カ」。これ続けて読むと「大サカ（大阪）」という文様になります。遠目からは全く分からないのですが、近づいてみるとこんなおしゃれな文様があったんだということが分かります。この型紙の場合は、小さな円を使って「大サカ（大阪）」という文字を彫刻し、デザインとして採用していることが分かります。

型紙のデジタルアーカイブ化を通して気づいたことなのですが、型紙はありとあらゆる文様が彫刻されていて、文様の宝庫と言える資料です。また、型紙からは当時の職人たちの技術の高さを目の当たりにすることができます。さらに文様に注目すると、同じモチーフも、実は様々な表現で創意工夫を積み重ねていたということが、コレクションの整理によって実感できました。型紙のデジタル化を進めることによって、文様を多くの方に見せることができるようになり、「デザインとして活用できるのではないかと声を掛けていただくようになりました。



型紙は学术研究のみならず、広く社会に知ってもらえるのではないかとということで、型紙の利活用について話を展開していきたいと思っています。角川ソフィア文庫から出版された本の表紙のデザインを紹介します（『柳田国男コレクション』、角川ソフィア文庫）。これらは全て型紙のデジタルデータの中から装丁担当者が選択して、デジタルデータに色をつけて表紙として活用したものです。型紙はそのままですと茶色くて地味な印象を与えますが、色が変わると雰囲気も大きく変わり、新しいものに生まれ変わっています。伝統的な文様と現在の技術がうまく融合し、新しい表紙へと生まれ変わりました。この

他にも、最初にデジタル化した型紙のコレクションは、デジタルデータをもとに文様の情報をこつこつと蓄積していきました。枚数自体は18,000枚にも及びましたが、データベース上で文様の名前からデータを検索できるようになり、同じモチーフを比較しながら型紙を研究する、あるいは、解説をまとめるということができるようになりました。型紙を所有している会社のホームページで、型紙の解説を掲載いただきました。こうした型紙の解説もですが、コツコツと続けていくとコラムも60を超え、書籍化することになりました。もちろん、ウェブと本の体裁は違うので、文章を直し、装丁も変更して、一冊の文庫本として出版することができました（拙著『ニッポンの型紙図鑑』、青幻舎）。解説は、梅、桜、菊などモチーフごとにまとめ、モチーフの示す季節や意味などを型紙とともに紹介しました。発売後に反響があり、私自身が改めて日本の文様に対する関心の高さに気づくきっかけともなりました。「生活様式が大きく変化した現在、なんとなくいいなと文様を見ている、意味や歴史を知らなかったから、本としてまとめてくれて良かった。」というような声もいただきました。

最後に簡単にですが、まとめを述べていきたいと思います。私自身、偶然に出会った型紙という資料であり、埋もれていた型紙のコレクションを整理したということになりました。もちろん、こ

れは一人で成し遂げたものではなく、整理に携わってくださった方々の協力を忘れてはなりません。膨大な資料数なので、多くの人たちに支えられて整理が進められました。整理の当初は、私自身途方に暮れたこともありましたが、研究を継続していくことにより、現代生活への活用が形となり、結果として学術研究だけではなく、型紙に対する興味や関心を持ってもらえるような研究成果の還元が少しはできたのではないかと考えています。また、型紙研究では最近、日本全国各地に残されている資料を地域の文化財として保存し、活用していく動きも活発になってきました。

今後の展望としては、各地に所蔵される型紙のデザインを比較しながら、それぞれの地域の特色や傾向を明らかにしていきたいと考えています。型紙といっても、各地域でどのような布地に型紙が使用されるのか、地域の産業や暮らしとも密接に関わり合っていて、型紙のデザインも少しずつ異なっています。また、型紙は実は国内だけではなく、海外にも未整理の資料が残されています。十九世紀の終わり頃から二十世紀初めに、浮世絵などとともに、ヨーロッパやアメリカなどへ渡っています。まだまだ道半ばではありますけれども、地道に整理しながら、型紙の違いや特色を明らかにしていきたいと考えています。

私からの報告は以上となります。ご清聴ありがとうございました。





出版時代の文学 —西鶴の画期性とは何か—

文学部日本語日本文学科 教授

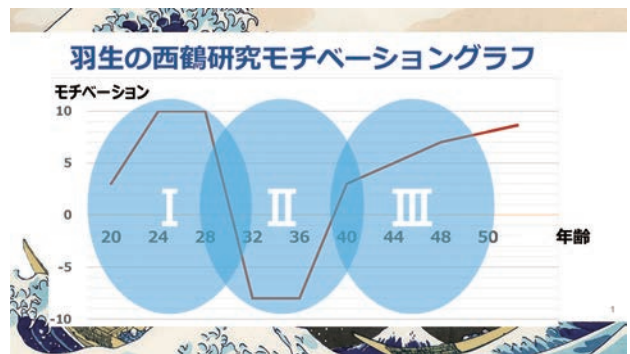
羽生 紀子

よろしくお願いたします。羽生紀子（はにゅうのりこ）です。本日はこのような発表の機会をいただき、ありがとうございます。後ほど触れますが、私はイギリスに滞在して研究を実施していた期間があります。彬子女王殿下のご留学時期とは微妙にずれているのですが、『赤と青のガウン オックスフォード大学留学記』を拝読すると、懐かしい名前がたくさん出てきます。当時の記憶が蘇ると同時に、世界は狭いなということも実感いたします。

私の研究テーマは、大きく捉えると、文学とその生成環境についての研究です。ある文学作品があるとして、それがどのような環境のもとに成立しているのか、その環境が作家自身や作品にどのような影響を与えているのかということをはっきりとしようとしてきました。具体的には、江戸時代の浮世草子作者である井原西鶴を扱っており、生成環境として注目してきたのは出版メディアです。

さて、私と、この研究テーマの始まりについてお話しします。私の研究の原点は、西鶴文学がわからない、ということです。井原西鶴という名前はそれなりに知られているのですが、その作品を読んだことがある人は、そう多くはないでしょう。私も大学に入った頃は、名前くらいは知っているな、という程度でした。ちなみに私は大学、大学院と武庫川女子大学です。附属中学・高校からの人に比べると新参者ですが、出身者です。大学の授業で西鶴文学と出会い、こういう作品があるんだなというところが始まりです。西鶴は、日本文学史上、様々な面で画期性があると評価されている作家です。ただし、そう言われても本当のところは実感として捉えきれませんでした。西鶴文学の画期性ってなんだろう？こんなに多くの方が研究する西鶴文学ってどういうものなのだろう。

う。このような素朴な疑問、好奇心が原点です。今でもそれに対する完全な答えにはたどり着けてはいませんが、それなりに解明できたことがあります。



ここで、私の西鶴研究をモチベーショングラフで示してみます。まだまだ発展途上の人間なので、ちょっと気恥ずかしいのですが、作ってみました。大きく第1期、第2期、第3期に区分できるようです。第1期のスタートは20歳です。ここはまだまだ手習いを始めたという程度の時期です。モチベーションを数値で表すと3。やる気は10くらいあったかなと思うのですが、成果という面も勘案して3です。

私は学部時代に、西鶴に関する論文としては2本発表しました。今から考えますと、この時期は研究環境として恵まれていた時期だったように思います。当時は国文学科でした。修士課程は古くからあったのですが、新しく博士後期課程が設置されたタイミングでした。それが1991年。もうだいぶ前ですが、私が大学2年生の頃のこと、学科には活発に研究活動を展開されている先生方がおられました。学生の研究活動にも熱心に付き合ってください、ご指導いただくことができました。卒業論文は「出版文芸としての『日本永代蔵』—出版界の状況と西鶴の創作意識—」という

タイトルでした。ここですでに「出版文芸」とありますように、私の基本的な研究スタンスはここで、ほぼ確立しています。卒業論文の完成に至るまで、この研究スタンスが定まるまでには、それなりに紆余曲折、苦労があったのですけれども、そこは時間の関係上割愛いたします。振り返ってみますと、その後も含めて、この研究スタンスを編み出すというか、たどり着くまでのところが一番の苦労だったのかもしれませんが。一方で、ここから今まで研究スタンスが変わらないってどうなの？と自分でも思ってしまいます。もちろん調査方法だとか分析手法は、深まっている…と思いたい。また、西鶴作品は25作品ほどありまして、研究スタンスが定まっても、具体的にやるべきことが尽きることはありません。ノーベル賞を受賞される方々も、だいたいは20代での研究が基礎になっているとも言いますので、まあそんなものかな、とも思います。全く違うレベルの人たちと比べるな、という話ではありますが、それで自分を納得させておきたいと思っています。

西鶴文学を解明するに当たって、なぜ出版を重視するのかということについて説明します。現在の文学作品は、基本的には出版されることによって作品として成立します。インターネット時代になって話がちょっとややこしくなってきましたが、現代でも作家が作家と名乗る場合、やはり自分の作品が出版されていることが前提となるでしょう。そのような文学のあり方が発生したのが江戸時代だったのです。出版技術自体は、奈良時代に伝わっていたのですが、江戸時代以前には出版が広く行われることはなく、ましてやそれが商業と結びつくこともありませんでした。出版が商業活動と結びついたのは江戸時代のことで、西鶴は作品を出版することを前提に文学活動を行った日本文学史上最初の作家でした。文学作品が商品となった新しい時代の作家なのです。従来西鶴研究においても、出版ということは重視されてきましたが、それは出版という現象を大きく捉えるにとどまっていた。

私はそれを西鶴自身の個別具体的な環境として捉えることを目指しました。西鶴周辺の出版者、大坂や京都出版界の実態を調査し、当時の出版界のあり方を明らかにするということを目指しました。大学院生時代も、西鶴周辺の出版業者の具体

的調査と作品自体の分析という二つの視点から、西鶴の前期作品についての分析を進めました。修士論文は『『諸艶大鑑』論—作者と書肆の相関—』。この頃はやることが一直線に見えていたもので、研究面に関してはひたすら迷いなく邁進という、そういう感じでした。将来的な方向性に不安と躊躇がなかったわけではないのですが、そのままの道を進みまして、博士後期課程での研究テーマは、「西鶴の浮世草子の創作主題と社会的環境、特に地域及び出版環境との相関関係について」（日本学術振興会特別研究員（DC1）としての課題）というものでした。今から見るとちょっと張り切り過ぎているというか、気合いが入りすぎたタイトルのような気がします。これらは博士學位論文「西鶴と出版メディアの研究」としてまとめることができました（2000年、単行本として刊行（日本出版学会賞奨励賞受賞））。大学院修了後、ポストク時代のテーマは、「貞享・元禄期における作者と出版環境との相関についての研究」（日本学術振興会特別研究員（PD）としての課題）でした。貞享・元禄期は西鶴が活躍した時代です。

次にモチベーショングラフ第2期に入ります。この時期は数値が落ち込んでいます。ここまでそれなりに順調に西鶴と出版についての研究を行ってきたのですが、研究を進める中で、何か迷いが生じていました。自分自身の、出版と文学を絡めた研究を一生懸命やっていたわけですが、国内の出版文化研究の状況に物足りなさを感じるようになったのです。その中で海外、特にヨーロッパにおける出版文化研究に目が向くようになっていきました。西鶴や日本文学、文化と直接の関係があるわけではなく、出版文化史やメディア論という観点からの研究になります。出版というメディアがいかに社会や文学に影響を及ぼしたのか、そういった研究がヨーロッパを中心に行われていることに気づき、その方法を吸収したいと考えました。——そこで出かけてみることにしました。

と簡単に申しましたが、実際にはコネクションもなく、目指す研究は日本文化そのものに関わるわけでもないので、なかなか苦勞と申しますか、無謀なところがあったのですが、とにもかくにも、イギリスの大学の出版文化研究をされている教授に手紙を出すところから始めました。当時、

電子メールはすでにあったのですが、会ったこともない人にいきなりメールを出すのは失礼だろうという時代でした。しかも相手は多分イギリス紳士です。そこで、すごく立派な便箋を買ってきて、封筒もものすごく気を遣ってと、一世一代の手紙を出した覚えがあります。その後、電子メールでやりとりを重ねて受け入れてもらい、2年間の予定でイギリスに出かけました。18、19世紀のロンドンを中心とする出版界の動向と日本文化との接点の調査、あと出版文化研究についての理論を吸収するということが目的でした。2002年の10月のことでした。

このイギリス行きは志高く、最初は一生懸命ヨーロッパの出版文化研究を自分の研究に組み込むべく取り組んではいたのですが、致命的な落とし穴といいますか、欠陥があったんですね。それは決定的な英語力不足です。最初は頑張っていたのですが、ロンドンをうろちよろしているうちに、ついつい日本学系のところへ出入りするようになって、江戸の世界に結局舞い戻ってしまいました。イギリス滞在の途中からはロンドン大学SOASですとか、大英図書館や大英博物館などに出入りして、日本文化研究者の人たちと交流するようになりました。変体仮名が読めて古文がわかるとなれば重宝されるのです。その頃、私はポスドクというある意味気楽な立場の人間でしたので、「これちょっと読んでよ」と声をかけやすかったようです。また、イギリスの日本学関係の先生は日本語のスキルが落ちるのが心配ということで、日本語で話したいと思われているようでした。一方、私は英語を話さないといけないと思っているので、あちらは日本語で話して、私は英語で話すというような、傍から見ると変な会話をしていました。

そして、2004年10月に帰国して本学に着任ということになりました。その時の私に課されたのは、本学の学術フロンティア推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究—文化形成のモチベーション—」（代表者：西島孜哉教授）の実動部隊としての役割でした。このプロジェクトは、本学はもちろん、国内外の大学研究機関の研究者130人以上が参加したもので、私も自分自身の研究課題でサブリーダーとして参加するとともに、プロジェクト全般の活動支援に当たりました。高

橋亨子学長をはじめ、学内の多くの先生方にお世話になり、その先生方のご研究にも触れて、とても勉強になりました。郡副学長にもサブプロジェクトのメンバーとしてご参画いただいていた。私自身、とても勉強にはなったのですが、一方で、私個人の西鶴研究は残念ながら低調になっていました。そもそもイギリスにいる間は、欧米での日本関係の出版物の調査を行ったりして、西鶴から距離を置いてしまったのと、日本に戻ってからもプロジェクトに貢献できる研究を優先していました。プロジェクトでは上方浮世絵のコレクションも整備して、私もいくつかの論文にまとめました。流光斎という、上方浮世絵の祖と言われる絵師の役者絵が中心のコレクションです。この頃、世界的に上方役者絵が盛り上がっていました。それには本学のこのプロジェクトの貢献もあったのですが、2005年にロンドンと日本で展覧会なども開催されまして、本学のコレクションも出品されています。この展覧会は、彬子女王殿下の御著書『赤と青のガウン』で、エリザベス女王陛下とのお茶会のエピソードで触れられていたものかと思います。

この時期を経て、私のモチベーショングラフの第3期になります。プロジェクト終了後もなかなか西鶴が戻ってきてはくれなかったのですが、だんだん西鶴が話しかけてくれるようになりました。幻聴かもしれないですが、だんだんと西鶴研究のペースが戻ってきました。

現在は西鶴の後期作品群を扱っています。『武道伝来記』『新可笑記』『本朝桜陰比事』です。大学院生の頃に扱っていた前期作品は、版元との具体的な関わりを解明することが有効だったのですが、後期作品ではそこまでの版元の関与は見られなくなっています。後期作品においては、西鶴がどのような典拠や素材を利用しているのか、それをどのように作品化しているのかという観点からの研究が有効です。そして、西鶴が三層構造で作品世界を構築するという、かなり複雑で高度な笑いを読者に提供するという方法にたどり着いていることが分かってきました。

ここから見えてくるのは、西鶴がいかに多くの知識を手に入れているかということです。西鶴は町人階級で、それまでの時代の知識人とは異なる階層です。そのような人物が非常に豊富な知識を

手に入れられるようになったのは、出版によって日本の知的環境に大変革が起こったからなのです。ごく一部の人々のものであった知識が、出版によって、より広い階層の人々にアクセス可能なものとなりました。西鶴のあり方は出版時代の新しい作家像と言えるものなのです。

先ほど紹介した上方浮世絵コレクションに続いて、本学のお宝を紹介します。本学の西鶴本コレクションもなかなかのものです。コレクションの中に、『小夜嵐』がありますが、これは偽西鶴本です。本学が詐欺にあったわけではなく、人気作家であった西鶴の名を騙った作品がいくつかあり、その一つです。偽西鶴本を含めて8点の西鶴本があります（『日本永代蔵』（2点）、『武道伝来記』、『新可笑記』、『本朝桜陰比事』、『西鶴織留』（2点））。同じタイトルの本が2点あったりしますが、これは初版本と後摺本です。本学の『日本永代蔵』の初版本はとても状態が良く、展覧会などにも貸し出されています。

このような西鶴本コレクションがあるということに示されていますように、本学には西鶴研究の伝統があるのです。私も次の世代にバトンタッチをしないといけないと、そろそろ気になっています。私で伝統を途絶えさせたら、これまでの先生に申し訳が立たないなと思ったりしています。西鶴研究の道のは果てしなく、まだまだ続きます。今後も、もうちょっとこういう感じでぼちぼちやっていければと思っています。西鶴の画期性をまとめるとこのようになります。

- 出版という環境で創作活動を行った日本で最初の作家である。
- 西鶴と版元との関係性からは、新たな時代の文学創出のあり方がみえる。
- 西鶴は出版物によって知識を形成した、出版ネイティブ。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



閉会挨拶

副学長／文学部長 郡 千寿子



まずは素晴らしい基調講演を賜りました彬子女王殿下に心より御礼申し上げます。また、本学の加茂先生、羽生先生、わかりやすく楽しく研究成果をご発表いただきました。他にも多くの女性研究者が本学で刺激的な研究を進めておられる様子がビデオで紹介されました。学術研究の面白さ、また深遠さ、苦勞も伴いますが、そういったものを超えて挑んでおられるお姿に、私自身も大変元気を頂戴した次第です。本日、この時間に皆様方はどのようなことをお感じになられたでしょうか。皆様のお心に好奇心の種が蒔かれたとすれば幸いです。

我々が幸せな未来を築いていくためには、科学技術の発展や革新というものはもちろん重要でご

ざいます。しかし、一方で、本日お話にありましたような文化芸術の研究の必要性も、皆様の中で考えていただくきっかけになったとすれば、大変うれしく思います。本事業は文部科学省、JST様から多大なご理解とご支援のもとに成り立っています。本学関係者のみならず、この事業を応援してくださっている全ての方々に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございます。

最後になりますが、ここに集った皆様方のこれからのご健勝と、好奇心の種をそれぞれが育てられて、今後大きく飛躍してくださることをお祈り申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。本日は最後までどうもありがとうございました。今後もご支援よろしく願いいたします。

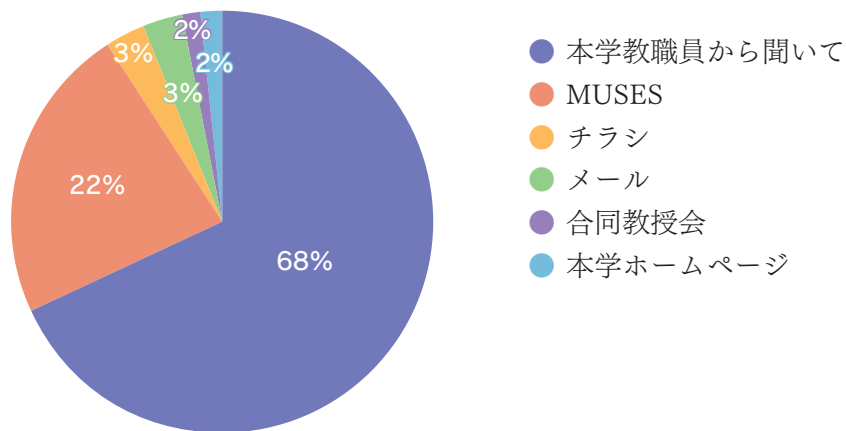


会場風景

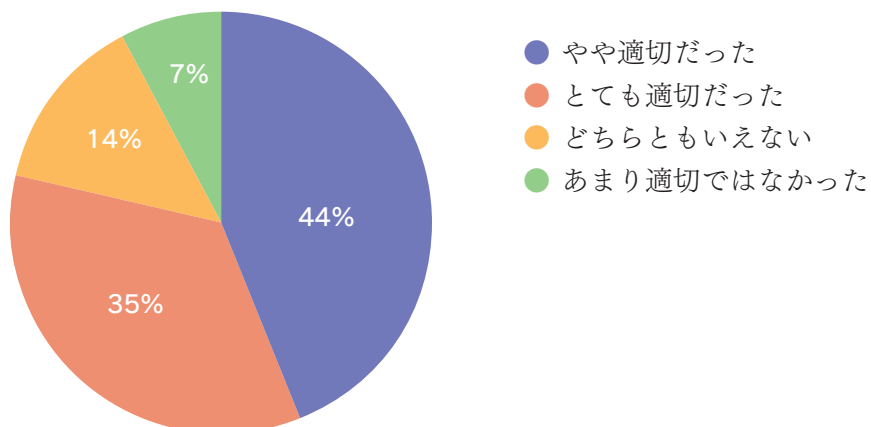


アンケート結果報告

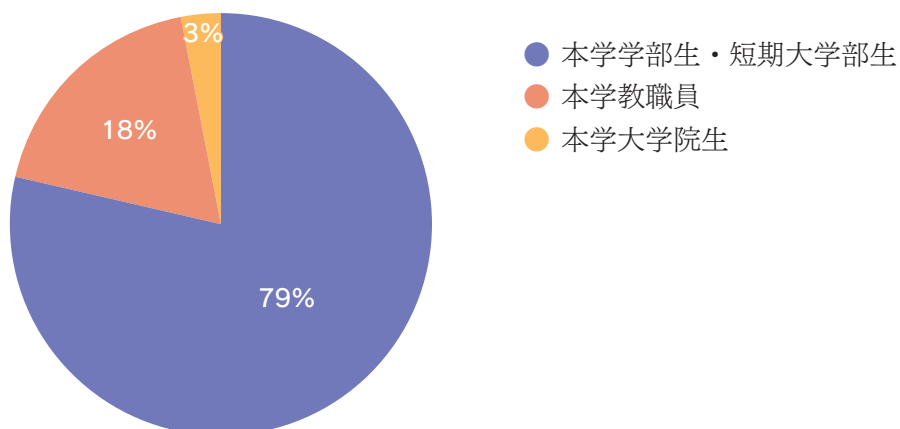
Q. 1. 本シンポジウムを知ったきっかけを教えてください。



Q. 2. 本シンポジウムの時間の長さは適切でしたか。



Q. 3. ご所属についてお尋ねします。該当するものを選択してください。



Q. 4. 本シンポジウム全体へのご意見・ご感想、今後聞きたい講演内容等があればお聞かせください。

<p>彬子女王殿下の話がとても興味深く刺激的で、講演に来て良かったと思いました。</p>
<p>彬子女王殿下をお目にかかることができとても光栄でした。</p>
<p>共感できる話も交えながら話してくださっていたのでとても楽しく聞くことができました。</p>
<p>初めてシンポジウムに参加させていただきました。とても刺激が多く、卒論に向けて、私も精進したいと思います。</p>
<p>平安時代からある文学作品についての深掘りを聞いてみたいです。</p>
<p>私の卒業研究が神社の衰退を問題視した、神社を日常的な空間にするための研究だったので、私の研究にも繋がる内容でとても興味深く面白い講演だったなと思いました。</p>
<p>研究者それぞれの研究内容がわかる、よい機会となりました。</p>
<p>彬子女王殿下をととても近くから見ることができ、また貴重な話を聞くことができ大変光栄でした。大学の先生方の報告もとても良かったので教育関連の講演があればまたぜひ行きたいです。</p>
<p>彬子女王殿下の著書『赤と青のガウン』を拝読してから講演を拝聴しました。著書の内容をご本人の言葉で聞くことが出来、臨場感があり、とても楽しかったです。お二人の先生の研究発表も初めて拝聴したので、先生がどのような研究をどのような流れでなさっているのかを知り、興味深かったです。また、先生方の授業とは違う一面を見ることができたような気がして面白かったです。今後聞いてみたい講演は歌舞伎の家にお生まれになった女性や、歌舞伎に関係のない家から梨園に入られた方、また、幕内力士の奥様などといった男性中心の世界に入られた女性のお話が聞いてみたいです。</p>
<p>彬子女王殿下をはじめ2名の先生方から、それぞれの専門分野に進んだきっかけや、どのように研究を進めてきたか、また今後の研究や活動について具体的にお聞きすることができて大変参考になりました。</p>
<p>私にとって異分野の研究者方々の取り組みを聞けて、共通するものや参考になることなど、収穫がありました。異分野の研究成果を知るだけでなく研究スタイルや手法を知る機会は意外に新鮮で啓発されるのでは、と思います。</p>
<p>染色型紙や井原西鶴のことなどを楽しく知ることができ、良かったです。文学部に所属していると、文学部の先生方のお話を聞くことが多いので、他の学部にも所属していらっしゃる先生のお話も伺ってみたいなと思いました。</p>
<p>どの講演者の方々も分かりやすい話し方でご自身の研究内容などを講演されていて、ユーモアも交えながらだったので時々くすっと笑いながら気軽に話を聞けました。</p>
<p>彬子女王殿下をはじめ、加茂先生、羽生先生といった実際の研究者のみなさんの生のお話が聴けたことがよかったです。自分の小さな興味関心からはじめて良いのだな、と思いました。</p>

※回答は一部抜粋しております。

Q. 5. 「女性研究者の研究力強化とリーダー育成」にはどのような取り組みが必要だと思われますか。

研究の楽しさを伝える授業を学生が受けることが必要。
具体的にどのような研究が行われているか学部生などにも伝える取り組み。
性別にとらわれないこと。
決まりにとらわれない事、自分が思ったことや不思議に思ったことをそのままにしない事。
苗字を変更してもキャリアが無くならないような配慮。
結婚や出産などでキャリアが途絶えないようにすること。
出産や子育て、介護の際の支援制度の充実。
他分野研究者とつながり、タテだけではなくヨコと繋がる機会、交流の場。
イベントに参加する機会を増加させる。
組織のポジションを得られる機会や基準の明確化など。
適材適所でそれぞれが力を発揮すること。
本人の意欲と、できるだけ研究に専念できるような環境（職場や家庭）づくり。
物質的な支援と心理的な支援の両方。
資金面の支援。
性別に関係はありませんが、自身の研究を進めて、社会に発信することが必要だと思います。その際にも性別の違いによる障壁があるなら、それを認識し、取り除く。一方で今回の講演で彬子女王殿下が仰られていたように、男性と女性が同じ土俵で戦わないといけないこともはないとも思うので、女性が男性の土俵に合わせに行くことは少し違う気がします。また、男性だからとか女性だからというバイアスを取り除いて、その人自身の能力を認めること。リーダーではなくても、その人自身の能力を認め、力を発揮できるように鍛えることが必要だと思います。また、文科省から採択を受けた補助金事業などを継続することは、本学の研究のために、さらに言えば研究の目的である社会のために必要なことだと思います。
教員の授業のコマ数の削減、委員の役割や会議などの負担減が必要かと感じます。私は職員として自分がカバーできる範囲を広げ、担任や各委員を担う先生方の負担を減らすために動いています。教員の負担を軽減するために職員が動きやすくなるような体制の構築を大学に求めたいと日々感じています。

※回答は一部抜粋しております。

参加人数	1628名
アンケート回答人数	66名

彬子女王殿下

武庫川女子大学
女子総合大学における挑戦的
次世代女性リーダー育成プログラム
第3回シンポジウム



2026 **2/13** 金
13:30 ▶ 15:30

場所 武庫川女子大学中央キャンパス 公江記念講堂

対象者 本学関係者・学生・生徒

テーマ 女性研究者の視点が拓く日本文化の新地平

本学では、分野横断型の共同研究や国際共同研究を推進し、女性研究者の研究力強化とリーダーシップ育成に取り組んでいます。本シンポジウムでは、彬子女王殿下をお招きして、研究者としてこれまで歩んでこられたご経験を通して、御講演いただきます。

スケジュール Schedule

司会 塩田 えみ (ラジオパーソナリティ・本学非常勤講師)

13:30 開会挨拶

学長/女性研究リーダー育成推進センター長

高橋 享子

13:35 基調講演

日本文化を未来へ伝えるために

彬子女王殿下

14:35 令和7年度

「女子総合大学における挑戦的次世代リーダー育成プログラム」事業報告

女性研究リーダー育成推進センター副センター長

中尾 賀要子

14:45 研究発表

文様のさまざま

—染色型紙と利活用—

文学部歴史文化学科 講師

加茂 瑞穂

出版時代の文学

—西鶴の画期性とは何か—

文学部日本語日本文学科 教授

羽生 紀子

15:25 閉会挨拶 副学長/文学部長 郡 千寿子



令和5年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)

シンポジウムについての
感想・ご意見をお聞かせください。
<https://forms.gle/Sa6fSbQU72yc713N7>



基調講演

日本文化を未来へ伝えるために

彬子女王殿下

経歴

寛仁親王殿下の第一女子として御誕生。お印は雪（ゆき）。

学習院大学を御卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに御留学。日本美術を御専攻になり、海外に流失した日本美術に関する調査・研究を行われ、2010年に博士号を取得されました。博士号の取得は、女性皇族として史上初めてのことです。

子どもたちに日本文化を伝えるために、御自身で一般社団法人「心游舎」を創設、総裁に就任され、全国各地でワークショップなどを行われています。

平成16年～22年 英国：オックスフォード大学マートン・コレッジ御留学

平成22年 哲学博士（英国：オックスフォード大学）

平成30年 名誉博士（国士館大学）

令和 6年 名誉博士（千葉工業大学）

令和 7年 名誉博士（トルコ：アンカラ大学）

肩書

(一社) 心游舎 総裁
 (一社) 日英協会 名誉総裁
 日本・トルコ協会 総裁
 (公社) 日本プロスキー教師協会 総裁
 (公財) 中近東文化センター 総裁
 三笠宮記念財団 総裁
 (公財) 市村清新技術財団 総裁
 (公財) 日本ラグビーフットボール協会 名誉総裁
 古典の日文化基金賞顕彰委員会 名誉総裁
 國華清話会 名誉会長
 京都産業大学日本文化研究所 特別教授
 京都市立芸術大学 客員教授
 同大学 芸術資源研究センター 特別招聘研究員
 立命館大学 客員教授
 國學院大学 特別招聘教授
 国士館大学大学院人文科学研究科 客員教授
 千葉工業大学 特別教授
 同大学 地球学研究センター 主席研究員

主な著書

・赤と青のガウン オックスフォード留学記
 PHP文庫 2024年4月
 ・新装版 京都 ものがたりの道
 毎日新聞出版 2024年7月
 ・日本美のこころ
 小学館文庫 2024年12月
 ・飼い犬に腹を噛まれる
 PHP研究所 2025年9月
 ・日本文化、寄り道の旅～彬子女王殿下特別講義～
 扶桑社 2025年11月

その他 多数

研究発表



文学部歴史文化学科
講師 **加茂 瑞穂**

文様のさまざま —染色型紙と利活用—

要旨

染色型紙は、布地を染めるために制作された道具で、さまざまな文様が彫刻されています。現在、需要は減少していますがおもに江戸時代以降の豊かな文様文化を垣間見ることができる貴重な資料です。本報告では、染色型紙のデジタル・アーカイブを通して得られた学術研究の成果や現代的な利活用について紹介したいと思います。



文学部日本語日文学科
教授 **羽生 紀子**

出版時代の文学 —西鶴の画期性とは何か—

要旨

井原西鶴は、商業出版によって文学が「商品」となった時代の作家でした。私はこれまで西鶴文学の生成環境として出版を重視し、前・中期作品を考察してきました。現在は、より高度な創作手法がみられる後期作品に注目し、典拠の利用や作品世界の三層構造を分析しています。出版時代の新たな文学としての本質の解明を目指しています。

司会者



ラジオパーソナリティ・本学非常勤講師
塩田 えみ

2025年度の活動報告

NEWS LETTER
vol.3・4はこちら



2025/ 4	令和7年度前期教育支援員配置
4	国際学会発表支援制度制定
4/1	令和7年度架橋横断的重点共同研究・グローバル共同研究支援 採択者決定
4/8	令和7年度女性研究リーダー研修員追加採択者決定
4/26	2025年度 KAKEN塾【若手研究・基盤研究(C) 以上対象】開催 計4回(4/26、5/10、5/31、6/14)
5/10	第1回大学院生交流会開催
5/28	第1回サイエンス・コモンズ セミナー開催
6/25	令和7年度ラビークラブ見学会開催
6/25	第2回サイエンス・コモンズ セミナー開催
6/30	令和7年度武庫川女子大学大学院学生フェローシップ 採択者決定
7/5	英語論文執筆セミナー開催
7/19	第1回国際学会発表準備セミナー開催
7/24	第1回外部評価委員会開催
7/29	第1回ランチタイムミーティング開催
7/30	第3回サイエンス・コモンズ セミナー開催
7/31	国際学会発表支援制度採択者決定
8/4~7	イースタン・ワシントン大学による女性リーダーシップ研修開催
8/6	第1回MUKOJO研究ポットラック開催
8/9・10	学童保育支援「Mキッズ☆1dayサマープログラム」開催
9/2	令和8年度女性研究リーダー研修 採択者決定
9/16	第2回大学院生交流会開催
9/20	第1回英語スキルアップ研修開催
9/24	第4回サイエンス・コモンズ セミナー開催
9/26	海外研究者招聘ワークショップ開催
9/27	海外研究者招聘講演会開催
10	令和7年度後期教育支援員配置
10/9	第2回MUKOJO研究ポットラック開催
10/16	第3回MUKOJO研究ポットラック開催
10/18	第2回英語スキルアップ研修開催
10/25	ライフイベントと研究活動両立支援セミナー開催
10/29	第5回サイエンス・コモンズ セミナー開催
11/1	第2回国際学会発表準備セミナー開催
11/21	第4回MUKOJO研究ポットラック開催
11/21	女性研究者交流会開催
11/26	第6回サイエンス・コモンズ セミナー開催
11/29	第3回英語スキルアップ研修開催
12/4	第5回MUKOJO研究ポットラック開催
12/20	若手研究者のためのデータ分析セミナー開催
2026/ 1/28	第7回サイエンス・コモンズ セミナー開催
2/13	第3回シンポジウム開催
2/17	国際学会発表支援制度報告会開催予定
2/24	第8回サイエンス・コモンズ セミナー開催予定
3/3	第3回大学院生交流会開催予定

主催・問合せ

武庫川女子大学
女性研究リーダー育成推進センター
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
E-mail cewl@mukogawa-u.ac.jp
TEL 0798-45-3506

武庫川女子大学
女性研究リーダー育成推進センター
<https://www.mukogawa-u.ac.jp/~cewl/>



武庫川女子大学
サイエンス・コモンズ
<https://scommons.mukogawa-u.ac.jp/>



彬子女王殿下

基調講演

日本文化を
未来へ伝えるために

武庫川女子大学
女子総合大学における挑戦的
次世代女性リーダー育成プログラム
第3回シンポジウム



2026 **2/13** 金 13:30 ▶ 15:30

場所 武庫川女子大学中央キャンパス 公江記念講堂

対象者 本学関係者・学生・生徒

テーマ 女性研究者の視点が拓く日本文化の新地平

本学では、分野横断型の共同研究や国際共同研究を推進し、女性研究者の研究力強化とリーダーシップ育成に取り組んでいます。本シンポジウムでは、彬子女王殿下をお招きして、研究者としてこれまで歩んでこられたご経験を通して、御講演いただきます。

スケジュール Schedule

司会 塩田 えみ (ラジオパーソナリティ・本学非常勤講師)

13:30 開会挨拶
学長/女性研究リーダー育成推進センター長
高橋 享子

13:35 基調講演

14:35 令和7年度
「女子総合大学における挑戦的次世代リーダー
育成プログラム」事業報告
副センター長 中尾 賀要子

14:45 研究発表



文様のさまざま
—染色型紙と活用—
文学部歴史文化学科 講師
加茂 瑞穂



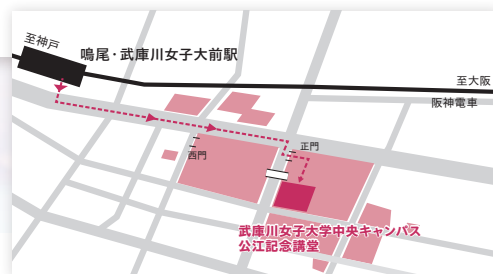
出版時代の文学
—西鶴の画期性とは何か—
文学部日本語日本文学科 教授
羽生 紀子

15:25 閉会挨拶 副学長/文学部長 郡 千寿子

主催・問合せ 武庫川女子大学 女性研究リーダー育成推進センター
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
E-mail cewl@mukogawa-u.ac.jp TEL 0798-45-3506



令和5年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)



阪神電車「鳴尾・武庫川女子大前駅」から徒歩約7分

令和8年3月21日 発行

編集・発行

武庫川女子大学

女性研究リーダー育成推進センター

〒663-8558 西宮市池開町6番46号

TEL:0798-45-3506

FAX:0798-45-3686

cewl@mukogawa-u.ac.jp

<https://www.mukogawa-u.ac.jp/~cewl/>

印刷所

大和出版印刷株式会社

神戸市東灘区向洋町東2-7-2